

1 はじめに

本校は、各学年は200名を超え、全校は700名近い大規模な公立中学校である。

本実践は、主に担任をする第3学年の生徒を対象に社会科の授業で行った。学校行事関係の内容は、総合的な学習の時間や特別活動と連携して行った。また、一部、第2学年の生徒に対しても行った。

2 実践内容

- (1) 平和学習
- (2) 日々のN I E

(1) 平和学習

① 学習指導要領における位置付け

学習指導要領 社会 歴史的分野より抜粋。

1 目標（一部抜粋）

グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す。

2 内容（一部抜粋）

C 近現代の日本と世界

(カ) 第二次世界大戦と人類への惨禍

経済の世界的な混乱と社会問題の発生、昭和初期から第二次世界大戦の終結までの我が国の政治・外交の動き、中国などアジア諸国との関係、欧米諸国の動き、戦時下の国民の生活などを基に、軍部の台頭から戦争までの経過と、大戦が人類全体に惨禍を及ぼしたことを理解する。

「平和で民主的な国家及び社会の形成者」の育成を実現するためには、戦争の悲劇的な事実を知ることが土台となると考える。また、内容(カ)の「政治・外交の動き」、「アジア諸国との関係」「欧米諸国の動き」などは、主に教科書を使った授業で丁寧に扱った。そのため、本実践は特に「戦時下の国民の生活」において「大戦が人類全体に惨禍を及ぼしたことを考えて理解させることに重点を置いた。

② 教材と授業の内容

平和学習を毎年行って、関心のある生徒も多くいる一方、「今の私には関係ない。」「面白くない。」と感じる生徒が一定数いる。どのような内容を使うべきか、毎年考えさせられる。そのような中で、セミナーでの講演、新聞各社からの情報提供、他校の先生の実践報告等から、授業で使える良い材料を得られるNIEの研究の場は貴重である。今年度は『知る原爆』（朝日新聞社）と、映画『この世界の片隅に』（この史代・双葉社/「この政界の片隅に」製作委員会）を用いた。

最初に、映画『この世界の片隅に』を視聴させた。この映画は、広島市・呉市を舞台に、空襲や原爆の被害、戦時中の人々の生活を描いたアニメである。アニメタイプの映画のため、どの生徒も興味をもっている様子があった。この映画のイラストと、原作者のこの史代氏のインタビューが『知る原爆』に掲載されている。

次に、『知る原爆』の記事を簡潔に解説しながら読み進めた。広島・長崎の原爆に関する記事、関係する方々のインタビュー記事などが載っており、それらの中から生徒に興味のある記事を選んでもらった。また、希望者には『知る沖縄戦』も紹介した。

映画『この世界の片隅に』と、教育特集の『知る原爆』を踏まえ、意見・感想を書くワークシートに取り組みさせた。以下、生徒の意見・感想をいくつか紹介する。

③ 生徒の意見・感想の紹介

<生と死に関するもの>

●戦争に対する恐怖や憎しみではなく、むしろ生存に対する感動を強く感じた。

●「当たり前の毎日がどれほど大切か」を強く感じ、戦争の歴史より「生きる」大事さが伝わった。

●戦争の時代を生きた人々のふつうの毎日にも、たくさん努力や我慢、そして小さな幸せがあったことがよく分かった。

●集団自決では「生き延びる」という考えがなく、「自決するしかない」という洗脳のようなものを感じた。

「天皇様ばんざい」という自分の意志ではなく国のためという考えに対して、命を捧げることが一番恐ろしいと感じた。

<現在の世界情勢に関するもの>

●今の世界でも、多くの国が核兵器でお互いを脅し合うニュースを見て、80年もたっているのにほとんど進歩していないようにしか思えずとても残念。

●核兵器廃絶は全世界共通の問題として取り組みを進めてほしいと思った。

●核兵器を作らないよう、様々な国を集めて大規模な会議を開いて平和への道を示すのも良いと思う。

●同じようなことがウクライナやガザでも起きていることを考えると、一刻でも早く戦争を終わらせることが大切であると強く感じた。

<心の被害に関するもの>

●はるみさん（映画登場人物）が亡くなってから、すずさん（映画主人公）の目の光がなくなって、戦争は人から感情も奪ってしまうのだと思った。

●心の傷が残っているということに驚いた。今まで原爆について学習してきたのは、建物や人への物理的な被害が多かったので、今回精神的な部分についてふれ、戦争はしてはいけないとより強く思った。

●原爆は人の身体を傷つけるだけではなく、人の心まで傷つけたことが分かった。しかも、原爆を同じ「人」が落としたりというのが辛い。

<今後や自分の向き合い方に関するもの>

●このさんのように、戦争を敬遠して見たくないものになっているかもしれない。戦争は知らなくてはいけないもの。学校が戦争を見たくないものになっているなら、その教育は間違っていると思う。私たちは、学校以外にも戦争を自分から知り、自分で考えなくてはいけない。学校はあくまで戦争の悪いところを知るきっかけとなる場であり続けるべき。

●日常は国の身勝手な判断によってどんどん危険なものとなり、人々の心の中も国によって染められていくのが分かった。私たちは、日々注意深く国と向き合っていかななくてはいけないと思った。

●原爆のことについて語ってくれる人たちがいるけれど、その人たちも本当は辛い思い出で話したくないので

はないかと思った。けれど、しっかり伝えてくれるというのは、二度と同じ悲劇を繰り返さないためだと思うから、伝えてもらった私達がしっかり次の世代へ伝えていかなければならないと思う。

●私たちに、歴史を学び、未来を考えるきっかけを与えてくれる。これからも平和のために自分にできることを続けていきたい。

●平和の大切さを胸に刻み、戦争のない未来をつくるために、知ること、伝えることが大切。

●「いつかあった昔のこと」ではなく、「これからも起こりうること」として覚えておきたい。

●その後の人々の記憶がいかに大切かを感じた。戦争の影響を実際に受けていた人の証言は、私たちが教科書で学ぶことだけではなく、生きていく上で知っていた方が良いことをたくさん知れると思った。

(2) 日々のNIE

その他、日々授業などで行ったことを紹介です。

- ①新聞閲覧コーナーの設置
- ②修学旅行の事前学習で1人1か所学習新聞の作成
- ③提出課題や長期休業課題に新聞ワークシート
- ④定期考査問題に授業や課題で扱った新聞を使う
- ⑤一緒に読もう新聞コンクールに取り組む

3 成果と課題

平和学習については、学習指導要領にもある戦時下の国民生活における惨禍のうち、物理的な人命や街の被害だけでなく「精神的な心の被害」気付かせることを目指した。また、他人事ではなく「今後の自分自身や日本や世界に関連付けて考える」ことを目指した。その点は、生徒の感想を見ると、多く書かれていたことは大きな成果である。さらに、ほんの一部の生徒を除き、ほぼ全生徒が興味・関心をもってこの平和学習に向き合う様子が見られたことも大きな成果である。

「平和学習で何を学ばせるのか」という目標の部分、また、「平和学習を避ける傾向をどうするか」という興味・関心の部分については今後一教員として継続して考えていく必要のある課題である。

来年度以降も、授業や学校生活でのNIEの取り組みを継続していきたいと考えている。